

藤井宏昭氏（元大平外相秘書官）に聞く

日中航空協定交渉

―聞き手・清水幹夫―



日中航空協定の調印を終えての記念写真。大平外相は前列の中央、橋本恕中国課長はその真後ろ、後列の左から2人目は藤井宏昭秘書官（北京・1974年1月5日）

心身消耗と闘いながらの交渉

——一九七四年の年が明けてすぐ、一月二日に大平外相は、国交正常化以後も交渉が進んでいない日中航空協定を詰めるため、慌ただしく訪中するのですが、このころ、大平さんは大変お疲れだったのですね。

藤井 そうでした。そもそも、その前年の七三年の八月には金大中事件が起き、大平外相の頭髪の白さが一段と増すほどご心労でした。さらに一〇月に第一次石油ショックが起きた。これは本当にひどいことになった。高度経済成長の自信が全部、ぐらっと揺らぐような……。大平外相はその時、日ソ平和条約交渉のため、ちょうど田中（角栄）首相の訪ソに同行していました。一月二日に訪中する以前から風邪をひかれていたのです。

——この訪ソのときは首相と外相は途中まで別行動でしたね。

藤井 大平外相はニューヨークでの国連総会に出席したり、イタリアを訪問して英国で田中首相と合流しました。あれはちょうどモスクワに入る前日、日独外相定期協議が終わって西ドイツに一泊しているときでしたね、第四次中東戦争が起き、石油危機が発生している、との第一報が入ったのは。そして田中首相、大平外相が帰国して一週間後にOPEC（石油輸出国機構）が友好国以外への石油の供給を制限する、という爆弾発表をやった。それで日本中は大騒ぎになり、大平外相も訪日したキッシンジャー米國務長官と会談して日本のアラブ政策に理解を求めるなど大わらわだった。

大平さんは、石油危機の対応などに追われ、ものすごく消耗していたのです。体力だけでなく精神

的な疲労も相当なものだった。そうした状況の中、一二月末になって、急遽、訪中が決まるのですが、三〇日に風邪がかなり悪くなり発熱もされた。それで森田一秘書官や同行した真鍋賢二秘書のほからいで永沢滋夫医師に同行してもらう、というような、体調不良を押しての訪中だったので。香港を経由しての訪中でしたが、香港は少し暖かった。しかし、北京は相当な寒さでした。

——わざわざ、香港を経由して行かれたのです。

藤井　そうです。まだ北京への直行便ができていない、という状況下で特別機は使わなかった。外相だけが直行便で行くわけには行かなかったのです。帰りは、たまたまチャーター便の空便を利用できたのですが。深圳で橋を歩いて渡るときは比較的暖かくてよかったのだが、北京に着いてみると寒いし、航空協定をめぐる中国側の姿勢も、大平外相が訪中したからといって態度が変わるわけではなく、厳しいの一語につきる状況で……。

——周恩来首相の自民党内親台湾派に対する非難は、相当激しかったようですが、大平外相が帰国する寸前に急転直下、交渉がまとまる経過は？

不調のまま帰国のハラを固めた真相

藤井　大平外相は主として姫鵬飛外相との話し合いを重ねたが、周首相との最初の会談でも取り付く島もない状況だった。周首相との二度目の会談は、どうしたのか待たされて一月五日の午後一時半にようやく始まったのですが、依然、周首相が妥協する気配はみじんもなかった。なんの成果もないうち

実
に午前一時すぎに会談が終わって宿舎に帰った大平外相は「残念だが明日六日、私は帰る」と、きつぱ
就
り言われたのです。もともと、予定していたチャーター便は六日に日本に向かうことになっていて、ほ
華
かに直行で帰る手段がそうあるわけではない。そして、翌朝までのうちに「不幸にして航空協定は合意
去
できなかったが、友好な日中関係は今後とも存続する」という帰国に際してのステートメントも作った
のです。ところが、大平外相は六日午前の姫外相との会談の席で、そのメモを取り出して発言してしま
ったのです。その途端、中国側はざわざわとしはじめ、一たん休憩ののち「ちよつと、こちらへ来てほ
しい」と大平さんを別室につれて行ってしまつたのです。大平さんについていたのは松永信雄首席随員
と國廣道彦中国課長の二人だったと思ひますが……。そこで、中国側があれよ、あれよと思うほど譲歩
したので、ここで始めて中国側が案を出した。それまで日本の案ではだめだ、の一点張りでしたから。

——日本の主張は、日台間には日本のナショナル・エアラインである日本航空の飛行機は就航させ
ない、台湾機の東京以外の日本寄港は認めないが東京からの以遠権は認める、といった内容でした。

中国は大平外相の交渉断念を本心と感じた

藤井　そうです。だが、中国側は台湾の中華航空という名称を変えるとか、以遠権を認めるのはお
かしい、と要求して一步も引かなかつた。ところが、土壇場で中国側が示してきた提案というものは、
大平外相が日本側の考え方として説明してきたものと、実質的に同じものだったので。

——その時点で大平さんは相当にお疲れだったと聞いていますか……。

藤井　そこで、ぎりぎりの段階になってようやく合意ができ、帰国の途についたのですが、大平さんは機中では椅子に座っていられなかった。飛行機の通路に毛布を敷いてお休みになったのです。それは風邪だけが原因ではなく、五日の夜から尿道結石による血尿にも悩まされていたのです。尿道血石は疲労すると発症しやすい病気ですからね。それだけ精根尽き果ててお帰りになった。

——そうした交渉の経過をみると、中国側にもいろいろ事情があつたのでしょね。

藤井　このときの会談ではないんですが、それまで周首相は大平さんと何回となく会談しています。あるとき周首相は大平さんにこんなことを言ったことがあるのです。それは、ある問題をめぐる中国とソ連の交渉のことで、双方の話し合いは難航し、最後まで双方の立場は隔たっていた。そこで周首相は、帰国することし飛行機に乗ったところソ連が譲歩してきた、という話なのです。帰国寸前にまとまったこの航空協定の土壇場の交渉の場面が「まさに、同じ場面だな」と、この周首相の話を思い出したのですが、しかし大平さんが、五日の夜に「あす帰る」といったのは、明らかにブラフ的なものではなかった。つまりね、大平さんは「もう、この交渉はダメだ」と決めちゃったんですよ。そりゃあ、人間だから一縷の望みはもっていたかもしれないが、大平さんが本心から「ダメ」と思ったことが中国側に伝わったのですよ。そこで「ちょっと待て」ということになったのではないか。あんな外交交渉は私のみたことがない。日程を延ばして、まだ、中国に残っていたら、相手も本気にしなかつたでしょね。

——大平外相は、そうした、いわば肉体的にも政治的にも大変な苦しみの中で航空交渉を成し遂げて一月六日に帰国されたのですが、帰国されて一週間目に、東京・瀬田の私邸が失火によって焼失する、という不運に遭遇します。

心労続きにも泰然としていた大平外相

藤井 一月二日の土曜日のことでした。大平さんは参院補欠選挙の応援のため地元の香川に入っていました。なぜ土曜日だと覚えているかというと、あの日、午後四時ごろ外務省の法眼（晋作）事務次官の部屋で、次官と私がいろいろ話をしていたので。そのとき、ちょうど、窓の下で消防車のサイレンが聞こえた。土曜日の午後ですから外務省の周りもまったく静かだったが、サイレンは気にもとめなかった。ところが、そのサイレンに合わせたかのように、佐藤嘉恭・次官秘書官が「大平外相の私邸が火事です」と次官の部屋に飛び込んできたのです。そりや大変だ、とすぐ車で私邸に駆け付けたが、すでに水びたしで火事に対応するにも男手が足りなかったのを覚えています。大平外相には、駆け付けてきた警察の車両の電話で連絡したのです。「大臣、ご自宅が火事で焼けました」と伝えたところ、大平さんは、ひとこと「そうか、みんな、無事か？」と言われ、本当に落ち着いておられた。中国から疲れきってお帰りになったばかりだし、こんどは火事とは……と、心労続きにむしろ、こつちのほうがかっくり、といった状況だったのに、です。大平さんの落ち着きぶりに、こちらが救われましたね。

——私も取材する側では、日本国内にいろいろ対立がある日中航空協定の交渉をまとめてから帰られたばかりだし、この火事は、ひよっとして『事件』ではないか、と一瞬、思いましたね。

藤井 私もそうだったんですよ。日中航空協定をめぐっては、反対の人たちから攻撃されていますから……。

——その日中航空協定の調印をめざした自民党内の調整は、大平さんにとって本当に苦難に次ぐ苦難の日々でしたね。

大荒れの自民党で孤軍奮闘する

藤井 とくに青嵐会には相当に攻撃された。自民党の朝食会では灰皿も飛んで……。あれは二月初めの国会審議の席だったか、青嵐会の議員らから大平外相がつるしあげをくつっていたときです。外務省から大臣あての大至急の電報が届いたのです。私は早速その電報を読みました。英語で書かれていました。クウェートの日本大使館がパレスチナゲリラに占拠され、大使ら一六人が人質になった。その電報はゲリラからのメッセージで、彼らの要求をのまなければ、一時間に一人ずつ人質を殺す、という内容なのです。党内からいじめられている最中に、今度はパレスチナ・ゲリラに……というわけ、こちらも大変だ、ということになって、いじめられている審議を中断して急遽、外務省に戻りました。そして、田中首相も外務省に來られてクウェート事件の対応を協議する、といったことで、本当に苦難に次ぐ苦難でしたね。

——それにしても、航空協定に異論を唱える党内反対派の大平外相への人身攻撃は、異常なほどだったのですが……。

藤井 当時、私は、いわゆる若造のくせにはないですが、私のお仲人であられた気易さもあって、大平外相にいろいろ、すげすけと申し上げていたのですが、それでも大平さんはあまり怒らなかつた。

実 顔つきも、どこかがさがさしていたし、「少しお笑いになつては」なんて言つたりしていたのですが、就 この航空協定の党内調整をめぐるのは、大平さんのあまりの孤軍奮闘ぶりを見かねてこつちも申し上げました、「もっと応援してくれる方はいないのですか」と。そうしたら大平さんは「君ね、総理大臣というのには一人で党の半分（あるいは三分の一）だったか記憶が確かでないが）なんだよ」と言われたのです。だから大丈夫だ、というわけなんです。そこで私は「田中総理は本当に大丈夫でしょうか。」

（大平）大臣を守ってくれないじゃないですか」という趣旨のことを申し上げたら、初めて怒られましたね。こつちびどく叱られた。「田中君が総理なんだ」と……。秘書官として仕えて、このときが一番叱られましたね。

——とにかく、田中・大平両氏の関係は、お互いにないものを持っていることを認め合つて、それをお互いに尊敬し合つているところがありませんか。

正しいか、正しくないか

藤井 そう。その後はしばらく私は口をつぐんでいましたがね。そのころ、大平さんは新聞でもあまり良く書かれなかつた。毎朝、私は私邸に迎えに行つて登庁する車の中でいろいろ案件をブリーフするので、大平さんの新聞記事についてもブリーフするようになりました。今日の朝日新聞がどうとか、毎日新聞がどうとか。あるとき、大平さんの言ったことで事実関係と違うところがある新聞に書かれた。「大臣、いかがしましょうか」と車の中でお伺いをたてたら、大平さんはこう言われたの

です。「歴史とはこういうものなんだよ。間違ったことが活字になって、定着していつてしまふ。こんなことは世の中に多いんだ」とね。なにか諦観めいたというか、あきらめみたいな感じなのです。とにかく、大平外相にまつわる記事にしろ、自民党内の議論にせよ、日中国交正常化交渉以後、いろいろいじめられつくして、ろくなことが出てこないんですから、大平さんもそんな気持ちになつていたのでしょうか。

大平さんという人は、自分というものが世間や他人にどう映っているかということとは、あまり気にしなかつた。現代の政治家では非常にめずらしい人だと思えます。何が正しいのか、何が正しくないのか、ということをもものすごく気にした。どう映るかということとは、私らみたいな政治の素人は横にいても気になるんですよ。もう少し、大臣がいいことを書かれないとかね。

——確かに、そのころは、青嵐会がまた暴れたの、大平外相をつるしあげたの、どうのと、そんな記事が新聞に毎日あふれていましたね。

藤井 とにかく、党内で大平外相の側に立つて発言してくれる人があまりいないのですから。おまけに、反対派の議員の発言は声も大きいし、何か理路整然としているんです。こちらからすれば、良く調べてきたなあ、といったもので……。もっとも、そうした人たちも国士然としたところがあって、「オイ秘書官、これを配れ」といわれて「敵方」の書類を配つたりしたものです。

——そんなところが自民党らしいといえは、自民党らしいですね。しかし、双方とも立場は違つても、それぞれ国を思い国のためにやっていたのですね。

実 就 華 去 国を思う政治家の本懐

藤井 そうなんです。だから、どこか痛快なところもあつた。大平外相の当時の苦しさは、明るさのある苦しさだったのでないか、と。それにしても、大平外相の時代は、日中国交正常化以後、本當に重大なことがいろいろ重なつたものだった。それは大変なことだったが、いまにして思えば、大平さんにとつては、本懐というか、国を思うというか、自分は正しいことをやっている、といった大平さんが一番好きな正攻法というのかな、それでやっている。だから、ここでみずから反論したり、人を使って反論させたりなんかしない。いずれ正しい結論が出る、ということでしたね。

——とにかく、日中国交正常化交渉そのものから、日中航空協定の交渉まで、ずっと賛成・反対双方の主張がまったく異なる根っこというものが続いてきたわけです、その最後の仕上げともいえる日中航空協定は、実務協定としては、一番難しいものだったのですね。

藤井 航空協定となると、国としての原則が出てきますからね。

——大平さんは、自民党内の調整でも、最後まで一步も引かず、青嵐会などの反対論に一人で頑張つたことは、後に評価が高まりましたね。

藤井 その辺は中国もよく見ていましたからね。稀有な政治家であつたと思います。

——自民党総務会で青嵐会の藤尾正行代議士が、航空協定をめぐる外務省の公電を暴露してしまつた事件の時は何？

外相に比べ蔵相はいいぞ

藤井 私も院内で開かれたその総務会に行っていました、公電は途中で本物だと気づきました。これは、機密が漏洩しているな、と。

——この交渉を見ていて、大平さんにとって北京での交渉が一番大変だったと思っていたのですが、むしろ、その後の日本国内の処理というか、自民党内の了承取り付け作業のほうが苦勞された、と言つてもいいですね。与党議員に公電まで暴露されるような目にあつて……。

藤井 その通りでした。このあと、三木武夫環境庁長官と福田赳夫大蔵大臣が田中首相を批判して辞任する、という政局動乱が起き、大平さんが蔵相に横すべりされたのですが、そのとき私は心配でよく大蔵省の大臣室にこつそり様子を見に行っていました。そしたら大平さんはこう言つのですよ。「オイ、大蔵大臣はいいぞ」つてね。いやに元気なんです。ちょうど大平さんが外相の時代は、重大懸案が次から次にやつてきて、担当課からいきなり大臣に直結して問題が持ち上げられ、判断しなくてはならない毎日でしたから……。

——日中航空協定交渉は「政治家・大平正芳」というものが芯からにじみ出た交渉と言つていいですね。

二〇年も早かった先見性

去 華 就 実

藤井 外交というのは、最後まで粘り強くなければならないのです。同時に、誠意というものが大事です。手練手管ではだめなんです。ぎりぎりの交渉になれば、人間が出ます。日中航空協定交渉をみていても、それが相手に分かるんですね。とにかく、国交が深まれば、それだけ人の往来も多くなる。だから航空協定交渉は、やはり歴史に残る交渉でした。大平外相を攻撃した親台派の人たちも爽やかであつたし、高い評価で今に至っているのは嬉しいことです。日中国交正常化のときは、追い風というものがあつたが、日中航空協定交渉のときは、そうはいかなかつた。

——一連の日中交渉を通じて、もう一つ感じるのは、大平さんの先見性ということですね。

藤井 最近、私は、二一世紀にいったいどういう文化になっていくのか、文化から世界の対立が生まれ、政治・経済にはねかえってくるかもしれない、文化は経済と同様に重要になる、と発言しているのですが、大平さんは、大平内閣ができて最初の施政方針演説で、すでに「文化の時代」ということを言われているのです。二〇年以上も早すぎたくらいの指摘ですが、それが、いま盛んに言われているのですから。要するに、日本は経済成長万能でなく、精神的な支えが必要であり、品格が必要だ、ということですね。いまそれが言われている。これもそのときに大平内閣が打ち出した「田園都市国家構想」も同じですね。大変な先の読める政治家の大平さんを私は随所で見えてきたのです。

(平成二二年二月一〇月、国際交流基金理事長室で取材)

日中航空協定交渉

藤井宏昭（ふじい・ひろあき） 一九三三年、東京生まれ。五六年、東大教養学部中退、外務省入省。七一年国際連合局経済課長、七二年大平正芳外務大臣秘書官事務取扱、七四年経済協力局技術協力第二課長、七五年アメリカ局北米第一課長、七六年在アメリカ合衆国大使館参事官、七九年人事課長、八一年アジア局審議官、八三年香港総領事、八五年北米局長、八八年官房長、八九年駐OECD代表部特命全権大使、九二年駐タイ国特命全権大使、九四年駐英国特命全権大使をへて九七年退官。九七年より国際交流基金理事長を務める。